

モードは語る

中野 香織

単色で奥行きある洗練

ビジネスパーソンの仕事着において、男女を問わず、やぼに見えるコーディネートがある。上着の色とトラウザーズやスカートの色が、同じ色相のだけれど微妙に違う組み合わせである。濃紺の上着と、それより少しだけ薄い紺のスカート。あるいは黒い上着と、それより半段階ほど色が淡い黒のトラウザーズ。着用者は上下同色のスーツのつもりのようなが、ちぐはぐな印象が拭えない。下はグレーをもってくるなど、違う色相を合わせたほうがはるかにセンスよく見える。

ビジネスウエアにおいてはNGに近いこの色の扱い方も、モードにおいては、トレンドに化けることもある。たとえば、

ニュー・モノクローム

ブルネロ クチネリが2018年秋冬コレクションで提案するテーマの一つは「ニュー・モノクロマティック」(新・単色)。これはまさに、同じ色相のなかで微妙に違う色を組み合わせることを意味するのである。赤の色相であれば、茶に近い赤、ボルドー赤、ピンクに近い赤、紫に近い赤など数種類の赤を重ねていくことで、全身は赤の印象ながら、複雑で奥行きのある洗練を表現することができる。

このスタイルを美しく見せるポイントは、各アイテムに異なる素材を使うこと、2種類の組み合わせではなく、3種類以上の同系色のグラデーションにすることだろうか。多種類を重ねることで、かえ



ブルネロクチネリが秋冬向けに発表した赤系のコーディネート

って全体の統一感が生まれていく。反対色を一色だけ、柄の中や足元などに取り入れると、メリハリも生まれる。

ビジネスウエアに取り入れるのは難度が高いが、カジュアルウエアならば、ヒントにできないだろうか。上着を濃紺、下を藍紺にするならば、シャツを瑠璃(るり)色にするとか、靴下を鉄紺にするとか。そしてどこか1カ所だけに白を使う。いつも同じ色ばかり買ってしまうという方には、試す価値はあるかもしれない。

その場合、「ニュー・モノクローム」を表現しているという自覚をもっていることが案外、大事である。ビジネス・モノクロームをやぼに見せる原因も、自分の見え方がちぐはぐであることに関して全く無自覚であるという心の態度にほかならないのだから。

(服飾史家)